

中国书画出版社
CHINA PICTORIAL PUBLISHING HOUSE

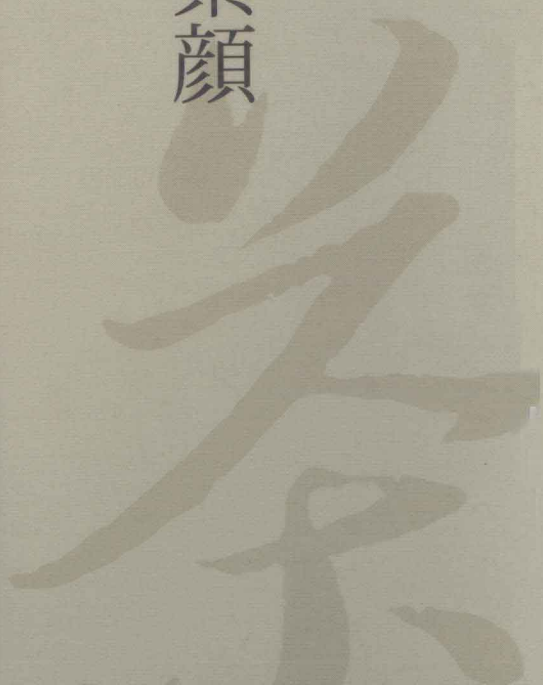


見識中国

清香綠韻

中国茶文化的素颜

【日】 棚橋篁峰 著



清香綠韻

中国茶文化の素顔

【目】 棚橋篁峰 著

茶

CHINA PICTORIAL PUBLISHING HOUSE
中国书画出版社

图书在版编目(CIP)数据

中国茶文化漫谈：日文 / (日) 棚桥篁峰著. —北京：中国画报出版社，2009.6
ISBN 978-7-80220-216-0

I. 中… II. 棚… III. 茶—文化—中国—日文 IV. TS971

中国版本图书馆CIP数据核字(2009)第089884号

清香綠韻——中国茶文化の素颜

出版人：田 辉

著 者：棚桥篁峰(日)

责任编辑：池 倩

编辑助理：张 桐

出版发行：中国画报出版社

(中国北京市海淀区车公庄西路33号，邮编：100048)

电 话：010 - 88417359 (总编室兼传真)

010 - 68469781 (发行部)

010 - 88417417 (发行部传真)

网 址：<http://www.zghbcbs.com>

电子信箱：cpph1985@126.com

印 刷：北京外文印刷厂

监 印：敖 晔

开 本：787mm×1092mm 1/16

印 张：8

版 次：2009年6月第1版第1次印刷

书 号：ISBN 978-7-80220-216-0

定 价：03600

目次

2 自序

6 中国茶の歴史と漢詩

6 中国茶文化の始まり

9 古代

10 唐代

26 宋代

32 元代

33 明・清代

41 現代

・全国的に普及 ・銘茶が生まれる ・陸羽の『茶経』 ・烹茶と庵茶 ・陸羽の後半生

・龍鳳茶の生産 ・「闘茶」の流行

・主流は散茶に ・紅茶の誕生 ・「工夫茶芸」の完成 ・飲茶法の変化

44 深遠な中国茶の世界

41 基本的な分類

47 緑茶

58 白茶

60 青茶(烏龍茶)

69 黄茶

71 黒茶

・龍井茶 ・碧螺春 ・蒙頂茶 ・廬山雲霧 ・高橋銀峰 ・南京雨花茶

・白毫銀針

・武夷岩茶 ・鉄観音 ・鳳凰單攪 ・凍頂烏龍

・君山銀針

・プーアル茶

128 126

著者紹介

終わりに

- 119 陸羽茶道の復元
115 潮州工夫茶
112 鳳凰単叢を訪ねて
108 中国茶の故郷へ
104 正山小種を訪ねて
99 大紅袍の謎を探る
96 新茶づくり
92 景德鎮へ
89 茶葉卸売市場を訪ねて
86 安溪鉄観音を訪ねて

86

中国茶文化そぞろ歩き

- 83 現代の名茶
・安吉白茶
82 あぶり茶
・太平猴魁
・六安瓜片
80 保健茶
・苦丁茶
・野菊米
・洋菊花茶
・千日紅茶
・絞股藍茶
78 工芸茶
77 緊庄茶
76 花茶
74 紅茶
・小種紅茶
・工夫紅茶
・紅碎茶
・祁門紅茶

清香綠韻

中国茶文化の素顔

【目】 棚橋篁峰 著

茶

CHINA PICTORIAL PUBLISHING HOUSE
中国书画出版社

自序

一九八〇年七月二十一日、初めて中国の大地を踏んで以来二十八年、二百回を超える中国訪問と文化交流の旅に出た。日数は千五百日を超え、走破した距離は百三十万キロを超えた。訪問した地域は全中国の直轄市、省と自治区、特別行政区に及んでいる。この旅は生涯続くだろう。

少年期から漢詩を中心にした中国文化に親しんだ私は、その故郷である中国の大地に若くして興味を持った。思いが募れば、旅に出るに如くはない。国交が回復すると旅の準備が始まる。生涯に一度という思いは、初めての訪中で打ち碎かれる。見れども尽きぬその大地は、日本の二十六倍、学ぶべき中国文化は五千年を凌駕する。語るべき友は十三億人、自らの視野の狭さに愕然とした。戦後の日本に育った私は、アジアを知らない、何よりも知っていないはずの中国が分からない。五里霧中とはこのことで、一度は二度となり、旅は日常となり、学習は時間との戦いとなった。中国文化の壮大な世界を学ぶことの真の素晴らしさに気づいたときは、訪中は五十回を超えていた。

「もう中国は行き尽くしたでしょう」。周囲の声が聞こえ始める。

それでも旅に出ると新たな発見がある。中国文化は無尽蔵だ。風はささやき、鳥は歌い、汲めども尽きぬ文化の泉は滾々と湧き出でて語りかけてくる。中国文化に憑かれていく自分がいる。知り尽くしたいという欲望は抑えることのできない感情となった。やがて中国文化への見聞は、中国茶・漢詩・仏教・歴史・芸術へと無限の広がりを見せ始める。

今回まとめることになった「中国茶文化の素顔」「深遠な中国茶文化の世界」「中国茶文化をそぞろ歩き」は、一九九九年五月、北京の松鶴楼で当時の中華詩詞学会副会長、中日友好協会副会長・林林先生ご夫妻と、人民中国雑誌社副社長・王衆一氏と私が話し合った結果、掲載が決まった。外国人である私が中国文化を『人民中国』に掲載することは至難の業である。様々な意見の中で、人民中国雑誌社が連載する中国茶文化について、日本人とし

て、現代中国の事情を理解し、中国人の茶文化をその内側から総合的に書ける日本人ということで、意見の一致をみた。その点に意を致して連載は始まる。当初は漢詩についての連載だったが、二〇〇四年から中国茶文化に関する連載が始まり、二〇〇八年をもって終了する。訪中二百回を超えたことと連載の終了を区切りとしてこの機会にまとめることにした。

文化交流を行うことで訪中二百回は過去にその例を見ない。ただ回数を重ねただけだとの批判もあるが、両国の相互文化理解の一助にはなったと自負している。

中国茶文化以外にも交流のお手伝いをさせていただいたものも含んで、主なものだけで峨眉山良寛詩碑の建立、峨眉山馮崗良寛小学校の良寛像寄贈、河口慧海修学塔の寄贈、甘肅省山丹県万里の長城修復、白帝城国際吟詩会開催、長安国際漢詩大会開催、アジア国際漢詩コンクール開催、熊耳山空相寺達摩殿建立、中国茶文化国際検定の開催、北京国際吟詠会の開催などである。人は語り合い、共に行動することで理解し合える友人となることができる。遠くから眺めているだけでは心は通じない。好き嫌いを越えて、口頭泡を飛ばし議論し合い、汗を拭うことな
く手を携えて「百尺の竿頭、更に一步を進む」という精神が大切なのだと言実感している。

私は、訪中百回の時、「中国という国を好きか嫌いかで見ることがはしない、真に理解するために客観性のある立場で中国文化を理解したいから文化交流を続けている」と中国の友人に語った。人生をかけての交流の結果、もし、中国文化の真理に近づくことができれば、好きになり、心の故郷となると信じている。しかし、道は半ばである。

中国茶文化は趣味の範囲でいいという人もいるが、茶の清らかな香りと爽やかな味わいは中国文化の総合的理解なくしては、たどり着くことはできない。この本は、初心に返って読んでもらいたい。先入観なしに読んでもらいたい。読み終わった時、「唯覚両脇習習清風生（唯だ両腋の習々たる清風の生ずるを覚ゆ）」と感じていただけたらこれ以上の喜びはない。

目次

2 自序

6 中国茶の歴史と漢詩

6 中国茶文化の始まり

9 古代

10 唐代

26 宋代

32 元代

33 明・清代

41 現代

・全国的に普及 ・銘茶が生まれる ・陸羽の『茶経』 ・烹茶と庵茶 ・陸羽の後半生

・龍鳳茶の生産 ・「闘茶」の流行

・主流は散茶に ・紅茶の誕生 ・「工夫茶芸」の完成 ・飲茶法の変化

44 深遠な中国茶の世界

41 基本的な分類

47 緑茶

58 白茶

60 青茶(烏龍茶)

69 黄茶

71 黒茶

・龍井茶 ・碧螺春 ・蒙頂茶 ・廬山雲霧 ・高橋銀峰 ・南京雨花茶

・白毫銀針

・武夷岩茶 ・鉄観音 ・鳳凰單叢 ・凍頂烏龍

・君山銀針

・プーアル茶

86

中国茶文化そぞろ歩き

- 83 現代の名茶
 - ・安吉白茶
- 82 あぶり茶
 - ・太平猴魁
 - ・六安瓜片
- 80 保健茶
 - ・苦丁茶
 - ・野菊米
 - ・洋菊花茶
 - ・千日紅茶
 - ・絞股藍茶
- 78 工芸茶
- 77 緊庄茶
- 76 花茶
 - ・小種紅茶
 - ・工夫紅茶
 - ・紅碎茶
 - ・祁門紅茶
- 74 紅茶

- 86 安溪鉄観音を訪ねて
- 89 茶葉卸売市場を訪ねて
- 92 景德鎮へ
- 96 新茶づくり
- 99 大紅袍の謎を探る
- 104 正山小種を訪ねて
- 108 中国茶の故郷へ
- 112 鳳凰単叢を訪ねて
- 115 潮州工夫茶
- 119 陸羽茶道の復元

終わりに

著者紹介

中国茶の歴史と漢詩

中国茶文化の始まり

中国茶が中国でも日本でもブームを迎えています。ブームというものは独特の雰囲気を持っていて、これまで見向きもされなかったものが突然人々の話題に上り注目を集めることがあります。それはまた、大変おもしろいことで新たな発見があるのです。

しかし、中国茶は広大な地域に住む中華民族が数千年にわたって培った文化の集大成といえます。ですから、茶文化の様々な側面から俯瞰的に眺めてみる必要があると思います。そんな素顔を見ながら茶文化に現れた詩歌を読んで、中国茶に親しんでもらいたいと思っています。



神農

茶樹は六、七千年前から存在していたらしいのですが、最初にお茶を飲んだのは、一般的には神農氏であるといわれています。もちろん神農氏は伝説上の人物ですから、本当のことはわかりません。だいたい、五千年ぐらい前のことでした。

『神農本草経』には、「神農が百種類の草を食べ、七十二種の毒に冒されたが、茶葉で救われた」と書かれていて、最初は薬としてお茶を飲んでいたようです。さらにお茶は食用としていたこともわかっています。

現在も西南地域では、茶葉と米でお粥を作り、木の若葉を茶と同じように煎じて飲む習慣を持つ少数民族がいます。

約三千年前から四川省ではすでに一定規模の茶葉生産を行い、しかも中央宮廷に高級茶葉を献納していたといわれています。さらに二千年ほど前、前漢の終わり頃には蒙頂甘露が植えられたという伝説もあり、やがて茶を飲む習慣は魏晋南北朝時代になると、長江の中流、下流に伝わります。

三国時代、吳国（二二二〜二八〇）の皇帝孫皓は酒

の代わりに茶で官吏韋曜をもてなしたと『三国志』に書かれていますし、『南齊書』に武帝が「動物を生け贖にするのをやめて、茶等を奉納する」と書かれています。

この頃から文人たちも茶を好み、茶は文化的な雰囲気を持ち始めます。晋代の詩人、張載の『成都楼に登る』には、「芳茶は六清を冠し、滋味は九区に播く」が五言の古詩の中に出てきます。さらに晋代の文人杜育の『荈賦』という茶について詠った有名な詩歌があります。

靈山惟岳、

靈山は惟れ岳、

奇産所鍾。

奇産の鍾まる所。

厥生荈草、

荈草を生ず、

弥谷被岡。

谷に弥ねく岡を被う。

承豊壤之滋潤、

豊壤を承け之は滋潤い、

受甘霖之宵降。

甘霖を受け之は宵に降る。

月惟初秋、

月は惟れ初秋、

農功少休。

農功休むを少く。

結偶同旅、

偶同じく旅を結び、

是採是求。

水則岷方之注、

挹彼清流。

器挹陶揀、

出自東甌。

酌之以匏、

取式公劉。

惟茲初成、

沫沈華浮。

煥如積雪、

曄若春敷。

是れを採り是れを求む。

水は則ち岷方に之に注ぐ、

彼の清流を挹む。

器を挹び陶を揀べば、

東甌より出す。

匏を以つて之を酌み、

式は公劉を取る。

惟茲に初めて成る、

沫は沈み華は浮く。

煥は積雪の如く、

曄きは春敷の若し。

【通釈】

靈の宿る山岳に、素晴らしいものができる。

お茶の木が生え、谷や岡に一杯だ。

豊かな土壌で潤いのあるお茶になり、

甘みのあるよい雨は宵に降る。

月が良いのは初秋の頃、野良仕事を休むこともない。

偶然同じ時期に旅をして、

お茶を摘みお茶を飲みたいと思う。

水は、岷江に注ぐ水、その清流の水を汲む。

茶器を選び陶器を選べば、東甌のものが良い。

瓢箪の容器で茶葉を汲む、

その方法は周代の公劉が酒を飲む方法だった。

そうしてお茶ははじめてでき、

泡は沈み茶葉は花のように浮く。

きらめく様は雪のように白く、

輝きは春のお花畑のようだ。

この詩歌を読むと、お茶の生産の様子や水の選び方、茶器の選び方、飲み方に至るまで描かれていて、すでにお茶を美味しく飲もうとする人々の様子が分かります。

こうして、中国人にとってお茶は欠くことのできな
いものになったのです。

古代

古代には、お茶は薬であり食物でした。一体いつから飲むようになったのでしょうか。中国は広大な国ですから、いつ頃から飲まれるようになったのか、またどの地方から飲み始めたのかはよく分かりません。

杜育の『賦』が二世紀末期に書かれたと考えると、後漢から三国時代には飲んでいたと思われる。しかし、杜育のように茶をたしなんだ人はまれだと思われる。では一般的にはどんな飲み方だったのでしょうか。

三国時代魏国の張揖（ちやうゆ）（二三〇年前後）が著した『広雅』には、葍荆巴（ちやうけいは）（現在の湖北省と重慶市）の間の地方に、葉を採集して葉の餅を作る。老いた葉で作った餅は米で固める。煮る前に、まず赤色になるまで、火で炙る。それから、粉々にして茶器に入れて、お湯を注ぐ。葱、生姜、みかんの皮を混ぜる。これを

飲むと、酒の酔いが醒め、眠れなくなる」というように酒の酔いさましとして茶を飲んだことが書かれています。

また『三国史』「呉書・韋曜伝」のように、酒の代わりに茶を飲んだという記述があります。この頃からすでに茶は一種の飲料となっていたことが推測されます。また『広雅』には「茶を煮て飲もう」と書かれていることから、当時は「煮る」という方法で茶を飲んでいたと思われるのです。このような飲み方は一般的に非常に長く続きます。少なくとも唐代までは続いていたようです。ですから杜育のようにお茶を飲むことに水や茶器まで考えていたというのは、一部の文人や上流階級の人に限られていたようです。しかし、それはお茶の発展にとって重要なことでした。

唐代

全国的に普及

唐代中期には、茶を飲む風習が全国的に普及したと陸羽の『茶経』「六之飲」に書かれています。「唐朝は茶を飲むことが流行りだし、盛んになった。二つの都から湖北と湖南までの間にどの家でも飲んでい」とあります。

『封氏聞見記』には、「南方の人はよく茶を飲んでいたが、北方の人は、最初飲む人があまりいなかったのである。開元中期、山東から都まで多くの茶店が茶を煮て売っている。道行く人たちは皆お金を払って、飲んでい。……昼から夜まで飲んでいるので、ほとんど一般的な風習になった。中央で盛んになってから、辺境地域まで伝わったのである」と書かれています。

『旧唐書』「李玉伝」にも、「茶は米や塩と同じ

ように日常的な食物になった。どこに行っても同じ様な飲用風習である。また、茶は米や塩と違って、疲れを取る効果があるから、非常に重要な飲み物となったのである。特に民間でよく飲まれている」などの記述が見られます。

盛唐の詩人儲光羲（七〇一〜七六三）は次のような詩を書きました。

茗粥を吃するの作

当屋暑氣盛、
鳥雀静不飛。

念君高梧陰、
復解山中衣。

數片遠雲度、
曾不避炎暉。

淹留膳茗粥、
共我飯蕨薇。

敝廬既不遠、
日暮徐徐歸。

茗粥を吃するの作

当に屋の暑氣盛なり、
鳥雀静かにして飛ばず。

君を念う高梧の陰、
復た解く山中の衣。

數片遠く雲は度り、
曾つて炎暉を避けず。

淹留茗粥を膳し、
我と共に蕨薇を飯す。

敝廬既に遠からず、
日暮徐々に帰る。



『茶室図』

【通釈】

昼頃に暑気が盛んになって暑く、
鳥も静かにして飛ばない。

高い木の陰で君を思いながら、

暑くなってきたので山中の衣を脱ぐ。

数片の雲が遠くに行ってしまった、

暑い光を避けることができない。

残った茶葉で茶粥を作り、

ご飯とおかずと一緒に食べる。

粗末な我が家はもう遠くなく、

夕暮れにゆっくり帰る。

この詩を読んでもみると、茶粥として食べていたことが分かります。ですから一般的にはお茶は食用であったり飲用であったりしていたのではないのでしょうか。

当時の人々が一般にどのような飲み方をしていたかは、確実な資料はありません。しかし、宮廷においてはの様子は、『宮楽図』の中に描かれています。それを見ると、スープのようにして鍋からスプーンで取り分

けて飲んでいる様子がわかります。現代のお茶を飲むという考えかたとは大きく違うことがわかるのです。

銘茶が生まれる

唐代には茶の需要が増え、茶葉生産が著しく発達したため、たくさんの銘茶が生まれました。『唐国史補』で十九種類の銘茶を羅列しているので紹介しましょう。

- ① 劍南蒙頂 石花・小方または散芽とも呼ばれる
(四川省雅安市名山県)
- ② 湖州顧渚紫笋 (浙江省湖州市)
- ③ 東川神泉小団 (雲南省昆明市東川県)
- ④ 昌明獸目 (四川省綿陽市江油市彰明県)
- ⑤ 峽州碧澗・明目・芳蕊・茱萸寮 (湖北省宜昌市)
- ⑥ 福州方山露芽 (福建省福州市)
- ⑦ 夔州香山 (重慶市奉節県)
- ⑧ 江陵楠木 (湖北省荊州市)
- ⑨ 湖南衡山 (湖南省衡陽市衡山県)

⑩ 岳州漚湖含膏 (湖南省岳陽市)

⑪ 常州義興紫笋 (江蘇省無錫市宜興市)

⑫ 婺州東白 (浙江省金华市東陽市)

⑬ 睦州鳩坑 (浙江省杭州市建德市)

⑭ 洪州西山白露 (江西省南昌市)

⑮ 寿州霍山黄芽 (安徽省霍山県)

⑯ 蕪州蕪門団黄 (湖北省黄冈市蕪春県)

※ 中国の行政区分では、「市」の下に、さらに小さな行政区分としての「市」があることがある

などです。中でも四川省蒙頂山の石花という茶葉が最高であると断言しています。後人の「揚子江心の水、蒙頂山上の茶」という聯や、白居易(白楽天、七七二〜八四六)の詩『琴茶』、『琴里知聞するは唯淥水、茶中故旧なるは是れ蒙山』にも蒙頂山茶が詠われています。

唐代、南方では四十三の州と郡がすでに茶葉を生産していたといわれています。ですから、唐代は中国の茶葉生産の基礎を固めた時期といえます。この頃、北方ではまだ茶葉は生産されていなかったため、南と北